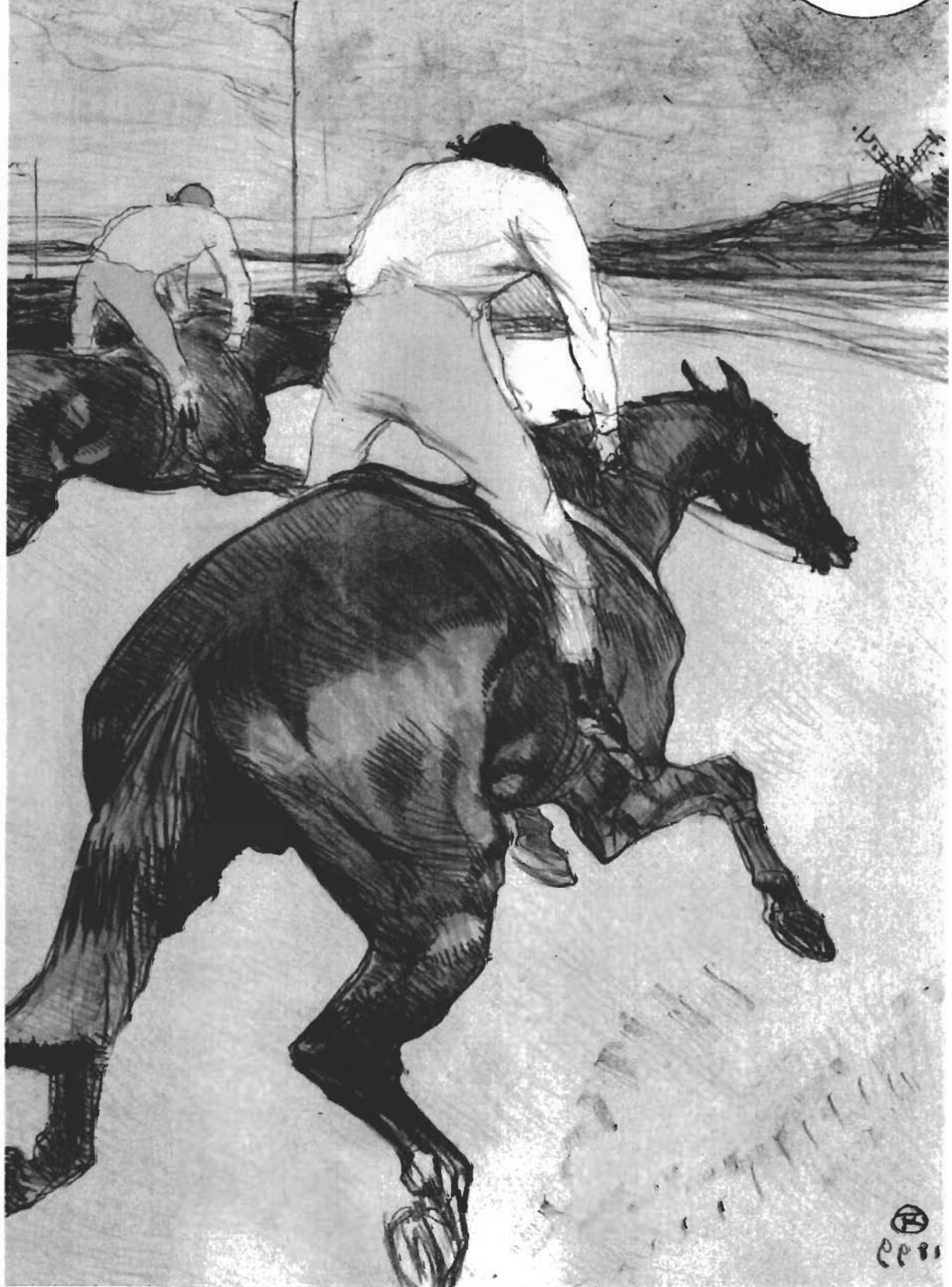


Hippophile

ヒポファイル

No. 27



Ⓜ
1991

目 次

馬事往来	
農用馬の牽引能力評価／十勝牧場のとりくみ	荒川由紀子 ……1
創成期の競馬放送	長岡 一也 ……4
研究論文	
幌馬大会から幌曳競馬へ — 1960年の資料を中心に — (2)	古林 英 ……7
特別記事	
馬の消化器病の最近の診断方法	佐々木直樹 ……18
乗用馬に見られる疾病の診断と治療	天谷 友彦 ……22
帯広畜産大学馬術部の紹介	柏村 文郎 ……26
北海道開拓記念館特別展示『HORSE — 北海道の馬文化』	古林 英 ……33
Journal of Equine Science Vol. 17, No. 3, September 2006 和文要約	……38
Journal of Equine Science Vol. 17, No. 4, December 2006 和文要約	……39
賛助会員名簿	……41
Hippophile 投稿規程	……42
編集後記	

Hippophile No. 27

— 編集委員 —

編集顧問	林 良博 (東京大学)	
編集担当常務理事	局 博一 (東京大学)	
編集委員長	兼子 樹嶺	
編集委員	草野 信一 (JRA 馬事部)	沼田 恭子 (イグレット軽種馬フォスターペアレントの会)
	近藤 誠司 (北海道大学)	松尾 圭二 (日本軽種馬協会)
	佐藤 美子 (写真家)	山野 浩一 (作家)
	末崎 真澄 (馬の博物館)	吉原 豊彦 (JRA 総研)
	田中 義朗	

表紙絵：騎手 (The Jockey)：アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック (1864-1901) 1899年 49.8×34.1センチ多色刷りリトグラフ 馬の博物館蔵

「騎手」は、晩年に近い療養中に一連のサーカスシリーズとともに表した作品である。ロートレックは、少年の頃に父親とともに乗馬をし、競馬場にもしばしば通った経験があり、晩年に再びその情景を思い巡らしている。後ろ姿の騎手は、あるいは馬と競馬を愛した父と自分の姿を映し出しているのかもしれない。

日本ウマ科学会

Japanese Society of Equine Science

研究論文

輓馬大会から輓曳競馬へ — 1960年の資料を中心に — (2) 古林英一



古林英一（ふるばやし えいいち）
1958年兵庫県生まれ。北海学園大学経済学部教授。1987年
京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻博士課程中退。
南九州大学園芸学部、北海道大学水産学部を経て2000年か
ら現職。1999年から軽種馬生産費調査委員。2001年10月
～2003年9月北海道地方競馬運営委員。

前号では、輓曳競馬の発足から1960年頃までの発展過程を概観し、1960年当時の輓曳競馬がどのようなものであったか、さらに、輓曳競馬の成立基盤の形成について論じた。今回は、当時の競走馬の特質を現在との比較において分析し、さらに当時の騎手の属性を明らかにすることで、後のプロ競技化の萌芽がこの当時に既にみられることを述べる。

前号の内容

1. はじめに
2. 輓曳競馬の成立と展開 — 1946～1960年 —
3. 1960年当時の競走馬資源
4. 開催状況 — 開催日程・番組編成・競走形態 —

5. 競走馬

当時の輓曳競馬は、先に掲げた番組表に記載されているように、出走馬を甲級、乙級、丙級、丁A級、丁B級、および三才^{*21}の6段階に格付け^{*22}し、それぞれの格付けごとに競走が組まれていた。この年、競走馬として登録された馬の総数は1,037頭で、最上級の甲級に格付けされた馬は最終的には21頭に過ぎない（表6）。現在の輓曳競馬で最高峰のレースとして位置づけられている「ばんえい記念」の前身にあたる農林大臣

賞典競走は甲級馬のレースである。格付けは馬格や競走内容などで判断しておこなわれていたために客観性に欠くきらいがあった。とはいえ、競走を白熱した面白いものとするためには、あまりにも体格差のある馬を同一レースに使うこともできないため格付けがおこなわれていたようである。

このことは当時の輓曳競馬の競走馬は今とは比べものにならないほど馬格に格差があったということを示すものであろう。当時は馬体重も計測されていないため、今となっては、どの程度体格差があったのかを検証することは困難であるが、ほぼすべての馬が日常的に使役されている馬であることを考えるとその体格差はかなりあったとみるべきである^{*23}。

ちなみに、その後、1964年からは体重制によるクラス分けがおこなわれるようになるが、これも無理な減量などが行われたことから廃止され、1973年からは現行のように取得賞金による格付け区分がおこなわれるようになった。

1960年度の場合、甲級馬は頭数的には全体のわずか2%に過ぎないが、獲得賞金額は22%をしめている。逆に、最下級条件の丁B級馬をみると、頭数では全体の4割を超えているのに獲得賞金額は2割にも満たない。

また、出走回数を見ると、甲級馬は1頭あたり年間

*21 現在の年齢区分では2歳である。

*22 格付けは年度途中で変更される場合もあったようだがそう多くはない。

*23 当時のことを知る関係者数人に話を聞いたところ、計測したことはないものの、今の馬に比べるとずっと小さく、馬体重はせいぜい800 kg程度だったのではないかと。

表6 級別頭数・賞金額・出走回数（1960年）

級別	頭数		賞金額		出走回数	1頭当たり賞金額	1頭当たり出走回数
	頭	%	円	%		円	回
甲	21	2.03	2,372,400	21.68	462	112,971	22.0
乙	54	5.21	1,456,700	13.31	571	26,976	10.6
丙	168	16.20	2,012,200	18.39	1431	11,977	8.5
丁A	200	19.29	1,464,700	13.38	1202	7,324	6.0
丁B	448	43.20	1,845,300	16.86	2288	4,119	5.1
三才	146	14.08	1,792,200	16.38	1236	12,275	8.5
計	1,037	100.00	10,943,500	100.00	7190	10,553	6.9

※「三才」は現2歳
 級別区分は年度最終段階
 出所：表4に同じ

20回以上出走しているが、三歳馬以外は、級が下がるほど年間出走回数も少なくなっている。当時の級別区分を現行の条件区分と同列に扱うことはできないが、2004年度の出走頭数・出走回数をみると、3歳以上（1960年当時の年齢区分では4歳以上）の場合、オープンから最下級の150万下までの各馬の年間平均出走回数は9.5～9.7回と殆ど差はみられない。より正確に言えば、現在は、各級ごとに出走回数が平均化するよう番組が組まれているのである。

当時の日程からみると、年間22走するためには7～8期は出走していたことになり、甲級馬は複数場に出走していたことがわかる。逆に、下級条件馬は特定の競馬場にだけ出走していたケースが多いことがうかがわれる。

関係者への聞き取りによると、昔は殆どが地元の馬だったというが、1960年の資料をみる限り、下級条件馬はともかく、少なくとも、甲級や乙級といった上位馬は4場を転戦し、それなりの賞金を稼いでいたことがうかがわれる。最上級である甲級馬21頭の1960年の競走成績などをまとめたのが表7である。賞金獲得額上位の馬はいずれも52日間のうち半数以上に出走していることがわかる。

1960年の最終開催である旭川開催（10月22日から25日までの4日間開催）をとりあげて、当時の馬についてさらに詳しくみていこう。この開催はシーズンの最後を飾る開催で、メインレースとして3日目には農林大臣賞典競走が組まれていた。ちなみにこのときの大賞典に勝ったのは名手といわれた中西関松騎乗のヤスヒラであった。

このシリーズに出場した馬は213頭である。1年の最後のシーズンということもあり、他のシリーズの出走頭数より多いとはいえ、この年の総登録頭数1,037頭からみれば2割強に過ぎない。しかしながら、甲級馬についていえば21頭のうち16頭が参加している。

この213頭を性別・年齢別にみたのが表8である。性別をみると、213頭のうちほぼ半数に相当する103頭がセン馬である。若齢馬では少ないものの、6歳馬以上になると、セン馬は過半をしめている。先にみたように、この時期、農家で飼養されている馬は牝馬が圧倒的に多い。このことから、昔の鞭曳競馬は農家が使用していた農耕馬が出走していたということがしばしばいわれるものの、農家で飼養している牝馬の多くは競走馬資源ではなかったとみることができよう。当時を知る関係者の話を参考にすると、競走馬として供用

表7 甲級馬の戦績 (1960年)

獲得賞金順位	馬名	年計			1着		2着		入賞		勝率
		期数	出走	取得金額	回数	金額	回数	金額	回数	金額	
1	バンユウハ	12	27	341,000	19	308,000	1	6,000	6	27,000	70.4
2	ヤスヒラ	13	33	259,000	8	170,000	4	28,500	18	60,500	24.2
3	コザクラゴ	15	46	240,500	6	70,500	11	72,000	26	98,000	13.0
4	アカン	12	34	215,800	9	126,500	6	36,000	17	53,300	26.5
5	ホーユー	7	20	186,000	6	109,500	6	40,000	6	36,500	30.0
6	コウリョク	9	23	156,000	9	118,500	5	19,500	6	18,000	39.1
7	ダイイチトヨシゲ	12	38	148,500	2	21,000	6	40,500	29	87,000	5.3
8	ハツハル	6	17	108,500	4	64,000	4	2,200	9	22,500	23.5
9	バンリュウ	6	17	101,500	1	25,000	4	30,000	12	46,500	5.9
10	イコイカチノボル	9	28	99,500	1	14,000	-	-	19	68,000	3.6
11	キヨユキ	6	18	87,000	2	38,000	2	17,500	9	22,000	11.1
12	アケマル	5	15	84,800	-	-	6	57,500	7	27,300	-
13	サツキ	8	26	84,800	1	13,000	1	8,000	19	63,800	3.8
14	トカチハナ	6	18	73,500	1	20,000	1	25,000	11	28,500	5.6
15	タルニシキ	7	21	62,400	2	2,300	1	5,000	13	34,400	9.5
16	バンハクチカラ	7	23	51,000	-	-	1	9,000	13	42,000	-
17	マツマエ	5	15	25,300	-	-	-	-	11	25,300	-
18	ブルトーザ	6	20	19,300	-	-	-	-	10	19,300	-
19	テルヒカリ	6	16	18,500	-	-	-	-	7	18,500	-
20	イマノトップ	1	3	5,500	-	-	-	-	3	5,500	-
21	バントヨタマ	1	4	4,000	-	-	-	-	2	4,000	-

出所：表4と同じ

された馬の多くは、農耕馬というよりは、むしろ砂利採取や運搬業などに供用されているせん馬や牡馬が主体であったといえそうである。

また、年齢構成からも興味深い事実が浮かび上がる。今日の輓曳競馬と比較するために、ほぼ同じ時期に開催された2004年度3回北見競馬に出走した578頭の年齢別頭数比率と、1960年の5回旭川競馬の年齢別頭数比率を比較したのが図4である。2004年の場合、最も多いのが3歳（現在でいう2歳）で、出走頭数578頭のうち約3割にあたる166頭となっている。次いで、4歳、5歳と年齢を重ねるにしたがって頭数は減少している。現在は旧3歳の春におこなわれる新馬能力検定から競走生活がスタートし、徐々に淘汰されていくのである

が、かつてはそうではなかった。1960年のデータをみると、最も出走頭数が多いのは7歳馬（今でいう6歳馬）で全体の約2割をしめている。次いで多いのが3歳で15%である。4歳・5歳の出走頭数はかなり少なくなっている。

4歳馬の出走頭数が3歳馬に比べかなり少なく、4歳・5歳・6歳と年齢が高くなるほど出走頭数が増えているということは、競走馬としての本格的な供用開始は今に比べずっと遅いということに他ならない。3歳でデビューしても、その後すぐに古馬の競走に使うわけではなく、馬の成長を待って競走に使うというケースが多かったのではなかろうか。

これは当時の競走馬が晩成型であったということ

表8 性別・年齢別出走頭数 (1960年10月旭川)

年齢	実数 (頭)				構成比 (%)			
	牡	牝	セン	計	牡	牝	セン	計
3歳	22	6	4	32	68.8	18.8	12.5	100.0
4歳	8	1	6	15	53.3	6.7	40.0	100.0
5歳	9	6	6	21	42.9	28.6	28.6	100.0
6歳	8	3	15	26	30.8	11.5	57.7	100.0
7歳	5	12	25	42	11.9	28.6	59.5	100.0
8歳	6	7	14	27	22.2	25.9	51.9	100.0
9歳	5	4	19	28	17.9	14.3	67.9	100.0
10歳	—	2	4	6	—	33.3	66.7	100.0
11歳	1	1	6	8	12.5	12.5	75.0	100.0
12歳	2	1	—	3	66.7	33.3	—	100.0
13歳	—	—	1	1	—	—	100.0	100.0
14歳	1	—	1	2	50.0	—	50.0	100.0
15歳	—	—	1	1	—	—	100.0	100.0
不明	—	—	1	1	—	—	100.0	100.0
計	67	43	103	213	31.5	20.2	48.4	100.0

注. 年齢は旧呼称による (3歳は現在の2歳)
出所: 表4に同じ

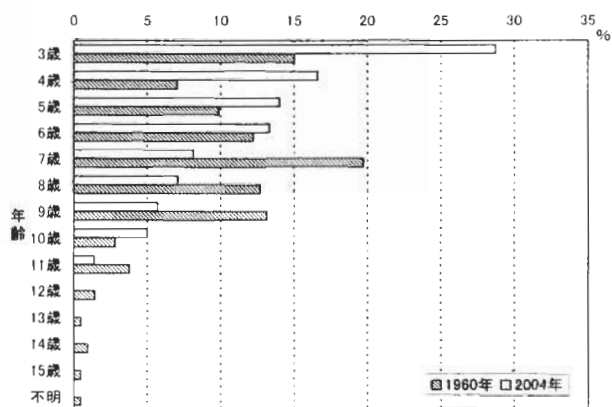


図4 出走馬の年齢別比率
注. 年齢は旧呼称による
出所: 表4に同じ

物語っている。先にもふれたように、当時の軌曳競走馬の血統記録は散逸しており、厳密な議論をおこなうことは不可能だが、晩成型の品種であるペルシュロンの血が濃かったことに基づくのではないだろうか。

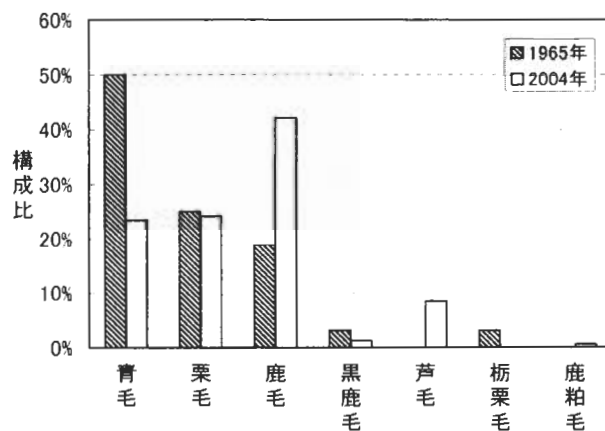


図5 毛色の分布
出所: 表4に同じ

今の競走馬が当時の競走馬から品種的にも変化していることをうかがわせるデータを示そう。図5は1960年10月の旭川開催に出走した3歳馬と、2004年度の同時期に開催された北見開催に出走した2歳馬（当時の年齢区分では3歳）の毛色の分布を比較したものである。サンプル数が多くないので確実なことはいえないものの、当時は青毛が最も多く、ついで、栗毛、鹿毛の順となっている。それに対し、2004年度では鹿毛が最も多く、次いで栗毛、青毛の順である。

周知のように、ペルシュロンの毛色は青毛もしくは芦毛が多い。当時、すでにプルトンなどは導入されていたが、ベルジャンはまだ導入されていない。重種馬生産にベルジャンが本格的に導入されるのは1970年代にはいつてからのことである。当時にくらべ、青毛の比率が大きく低下しているのはペルシュロンの影響が小さくなっていることによるのであろうと思われる^{*24}。

当時の軌馬の品種は雑多である。1960年の出走馬に関しての資料を得ることはできなかったが、少し後の1963年の競走馬については馬籍簿が残されている。こ

*24 品種と毛色の関係については、決して専門的知見に基づくものではなく、あくまで素人判断であることを断っておく。

表9 1963年度出走3歳馬および甲級馬の品種構成

品種	三歳馬		甲級馬	
	頭数	比率	頭数	比率
	頭	%	頭	%
重半血	34	24.6	7	36.8
重系	21	15.2	3	15.8
ベル系	21	15.2	5	26.3
ヘルシュロン	11	8.0	1	5.3
ブル系	1	0.7	—	—
中半血	48	34.8	3	15.8
不詳	2	1.4	—	—
計	138	100.0	19	100.0

資料：表4に同じ

の資料には品種や父母の名前も記載されている。そこで、1963年の馬籍簿に記載された3歳馬と甲級馬の品種を集計したのが表9である。3歳で最も多いのが中半血で35%をしめている。次いで多いのが重半血の25%である。中半血の馬の父母をみると、アングロ・ノルマンやブルトンが散見される。これが甲級馬となると、サンプル数は少ないものの、重半血が最も多く4割弱をしめ、逆に中半血は16%程度となっている。さすがに、高重量戦を闘う甲級馬では重半血やベル系などの重種が圧倒的に多くなる。とはいえ、中半血の甲級馬がいたことも特筆すべきことであろう。甲級馬の中半血3頭のうちの1頭は1960年に収得賞金額1位となったバンユウハである。バンユウハの父はアングロ・ノルマンのオスマンウーノエル、母は重系・笹波である。ちなみに、1960年の大臣賞典馬ヤスヒラはベル系で、父がベル系・錦波、母もベル系で第二松江となっている。ただし、馬籍簿に記載された血統・品種が正確であったかどうかについては疑問の余地なしとはしがたい。なかには父・母の名が記載されていないのに当該馬の品種が記載されていたり、血統不詳などという馬も見られる。品種や血統に関する関心はさして高くはなかったのであろう。

表10 出走馬の地域分布（1960年10月旭川開催）

	市町村名	頭数(頭)		比率(%)	
		頭数	比率	頭数	比率
管内	和寒町 (現. 和寒町)	2	0.94		
	比布村 (現. 比布町)	1	0.47		
	鷹栖村 (現. 旭川市)	9	4.23		
	東鷹栖村 (現. 旭川市)	4	1.88		
	旭川市 (現. 旭川市)	63	29.58		
	神楽町 (現. 旭川市)	7	3.29		
	東旭川町 (現. 旭川市)	6	2.82		
	深川町 (現. 深川市)	3	1.41		
	音江村 (現. 深川市)	5	2.35		
	納内村 (現. 深川市)	2	0.94		
	美瑛町 (現. 美瑛町)	7	3.29		
管内小計		109	51.17		
管外	上川支庁管内	58	27.23		
	空知支庁管内	24	11.27		
	十勝支庁管内	8	3.76		
	留萌支庁管内	6	2.82		
	網走支庁管内	7	3.29		
	釧路支庁管内	1	0.47		
管外小計		104	48.83		
合計		213	100.00		

出所：表4に同じ

次に、出走していた馬の地域分布についてみておこう。

当時の出走馬は地元の馬が中心であったことは少しふれたが、ここでとりあげた1960年10月の旭川開催に出走した213頭を馬主の住所別に集計したのが表10である。ここでいう「管外」というのは開催場ごとに指定された地域（「管内」）外の出走馬のことである。管外馬については出走奨励金が上乘せされることになっていた。いわば遠征馬といっていいたろう。この旭川開催時に出走した213頭のうち、管内馬（＝地元馬）はほぼ半数の109頭となっている。管内馬ではないが、旭川の属している上川支庁管内の他地区から出場した馬を加えると、8割近くが地元およびその近隣からの出走馬ということになる。

表11 出走馬の地域分布 (1960年10月帯広開催)

	市町村名	頭数(頭)	比率(%)
管内	帯広市 (現. 帯広市)	40	34.19
	芽室町 (現. 芽室町)	9	7.69
	清水町 (現. 清水町)	2	1.71
	新得町 (現. 新得町)	2	1.71
	鹿追村 (現. 鹿追町)	2	1.71
	音更町 (現. 音更町)	3	2.56
	中札内村 (現. 中札内村)	2	1.71
	池田町 (現. 池田町)	3	2.56
	豊頃村 (現. 豊頃町)	4	3.42
	管内小計	67	57.26
管外	十勝支庁管内	18	15.38
	釧路支庁管内	1	0.85
	網走支庁管内	5	4.27
	上川支庁管内	22	18.80
	空知支庁管内	4	3.42
	管外小計	50	42.74
	合計	117	100.00

出所：表4に同じ

同様に、旭川開催の1週間前に開催された帯広開催についてもみておこう(表11)。

この開催の出走頭数は、3日間開催ということもあってか、117頭と旭川開催に比べれば少ない。ここでもやはり管内馬が約6割の67頭をしめており、ここでもやはり地元馬が中心となっている。

6. 騎手・馬主・賞金

当時の軽便競馬の基本形態は、自分の馬を連れてきて競走に参加するというものであった。いわば馬主兼騎手兼調教師ということである。地方競馬の場合、当時、制度的に登録制度が確立していたのは騎手と馬主の二つである。そもそも調教師という職能が制度的にもまだ存在していなかった^{*25}。

残念なことに、1960年、軽便競馬の騎手免許所持者が何人存在したのかを直接しめす資料は残っていな

い。しかしながら、仮に、登録騎手数がわかったとしても、あまり大きな意味はないといわざるを得ない。というのは、馬主が騎手を兼ねるケースが多かったため、馬の数に近い数の騎手が登録されており、その数は少なく見積もっても千人を超えていたと思われるからである。

市営競馬組合に残されていた資料のひとつに「昭和34年度 騎手登録申請綴」という資料がある。この資料には1959年に騎手登録を申請した人の申請書、履歴書、戸籍謄本などが綴られている。ここに綴られた申請者の数は207人に及び、その殆どは申請が受理され騎手免許が交付されたものと思われる。単年度だけで207人の申請があることから考えれば、当時の騎手免許をもっていた人の数は千人を超えていたというところではないかもしれない。

この資料をみると、騎手申請は、6月25日の旭川を皮切りに、10月25日の旭川まで、4市で計14回受け付けられている。この当時、騎手申請をおこなった山田勇作調教師の記憶によると、戸籍抄本と写真をもって役場に行くと翌日には協議会^{*26}から騎手免許証が交付されたという。まことにもって簡単な仕組みである。1959年の騎手免許申請者について、添付されている履歴書などからその属性をみると、最も若い人では20歳代、逆に60歳を超える高齢の人もおり、年齢層は極めて幅広い。しかしながら、職業は極めて限られており、履歴書などで職業が判別しうる人はほぼ全員が、農業もしくは運搬業(馬追業などと記載されているものを

^{*25} 地方競馬の場合、騎手と調教師はかなり遅い時期まで分離していないが、軽便競馬の場合はさらに遅くまで調教師と騎手の職能分離はおこなわれなかった。軽便競馬では、騎手(騎乗騎手)・調教師(調教騎手)の兼業が最終的に認められなくなったのは1970年代終わり頃である。

^{*26} ここでいう協議会とは1968年に設立された市営競馬協議会ではなく、道と4市で構成されていた主催者協議会であろう。また、1962年の競馬法改正で地全協が設立され、免許登録は地全協の業務となった。

含む)のいずれかに従事していた。

1960年10月の旭川開催を例にとると、4日間の開催で騎乗した騎手は108人いた^{*27}。この108人を騎乗回数別に集計したのが表12である。上位には、松原仁三郎の32回を筆頭に、上田吉隆、平川政雄、山本幸一、中西関松^{*28}といった名前が並んでいる。平川以外の4人はその後もながらく、騎手・調教師(騎乗騎手・調教騎手)として活躍した人たちである^{*29}。

このように、1日に何回も騎乗し、複数の馬に騎乗している騎手がいる一方、4日間を通じて1回しか騎乗しなかったり、1頭にしか騎乗しなかった人の数も多い。3回騎乗というのは1頭で3走したケースが殆どである。

騎乗回数上位5人の騎乗馬をみると、松原仁三郎と上田吉隆は11頭の馬に騎乗、平川政雄は7頭、山本幸一は8頭、そして中西関松は10頭にそれぞれ騎乗しているが、5人とも自己所有馬は1頭だけである^{*30}。

彼らが騎乗のみを依頼されたのか、日常的な飼養管理まで委託されていたのかは、今回使用した資料だけではうかがい知ることはできない。しかしながら、中西関松の未亡人であるトシエさんの記憶によると、当時、中西は冬の山仕事のアルバイトとして輓曳競馬に騎乗しており、4市すべてを転戦していたという。自分の馬は1頭くらいで、残りはレース前に他人の馬を預かって騎乗していたということであるから、日常的

な飼養管理までは委託されていなかったようである。また、依頼されて騎乗した馬の所有者はいずれも旭川近隣の地区であるから、騎乗を委託していたのは地元馬主であり、彼らは中西の腕を見込んで^{*31}騎乗を依頼していたものであろう。とはいえ、ヤスヒラのような甲級馬の殆どは各地を転戦していたのであるから、中西に管理がまかされている期間も少なからずあるということになり、部分的には調教師的な役割もある程度は担っていたと考えられる。

以上述べたような状況から、松原や中西といった上位騎手らは既にセミプロ的存在になっていたことがうかがわれるが、その経済的基盤となる報償金はどのような水準にあったのだろうか。次に、この点についてみておこう。

表13は1960年の各場別の売得金額および賞金額を表している。なお、岩見沢は9日間の開催であるが、使用した資料では1日分のデータが欠けている。したがって、集計は岩見沢は8日間、4場の合計は51日間の集計である。4場合計でみると、売得金額に対する賞金額の比率は5.2%であるが、一目見てわかるように、旭川の収益性が最も良い。

51日間で612レースがおこなわれたので、1レースあたりの平均賞金額は17,540円となる。ちなみに、10月の旭川開催では、1着賞金の最低額は最終日の第1競走(丁B級)の3,500円、最高額は3日目第10競走(甲級、農林大臣賞典)の5万円である。

^{*27}この集計は、「昭和35年度競走成績綴」という資料に綴られた成績表に基づいたものであるが、誤植の多い資料なので、集計の際に多少の誤差が含まれている可能性があることを断っておきたい。

^{*28}ヤスヒラに騎乗していたのが中西関松である。ヤスヒラはこの年を含め、大臣賞典を3回勝っている。

^{*29}この表には、他に、七条京次郎、木村与惣治、鶴沼栄吉・武の兄弟など、後に調教師(調教騎手)として活躍した人たちの名も散見される。

^{*30}ヤスヒラの所有者も中西ではなく、夕張の佐々木勝義である。

^{*31}騎手として1,000勝(輓曳競馬の記録が整備された1973年以降)、調教師としても1,000勝をあげた山田勇作調教師によると、当時、中西関松は神様のような存在だったという。これまでの輓曳競馬における最多勝騎手はミスターばんえいといわれた金山明彦(3,299勝)であるが、これは記録が整備された1973年以降のものであり、もし、古い記録が整備されれば最多勝騎手は中西だったのではないかという人も多い。また、中西は自らの成績もさることながら、金山明彦騎手(現在は調教師)をはじめとする多くの後進を育てたことでも知られている。

表12 騎乗回数別騎手一覧

騎乗回数	人数	騎手名
回	人	
32	1	松原仁三郎
27	1	上田吉隆
21	2	平川政雄 山本幸一
19	1	中西関松
18	1	丸田政一
17	1	藤川晴雄
16	-	
15	3	七条京次郎 七条好春 重田清
14	3	木村与惣治 黒沢義雄 佐々木録郎
13	1	里栄作
12	-	
11	2	西野勘吉 木下定治
10	4	梶沼福美 加藤誠 鬼頭兼一 間島仁太郎
9	3	岡本勤 高橋芳一 松本武敏
8	5	中西伴都 小瀬太一 谷口一之 谷口甚吉 土本光威
7	8	小柳信一 木村哲男 斎藤輝夫 白瀬寅一 中瀬正人 藤田浩 吉田松四 長原慶治
6	5	瀬川武雄 元木兵二 田中芳雄 平野清茂 高橋佐吉
5	5	岡崎恒二 高橋幸男 田上正 山本顕允 山口静雄
4	12	鶴沼武 朝倉正一 稲辺忠輔 宇高輝次 北健次郎 後藤常市 佐藤武 早勢巖 細川基義 宮崎康博 白取裕吉 長屋藤雄
3	20	坂上成夫 長部稔 荒谷進 石橋敏男 石持武 井原堅 小野熊之助 影平国雄 加藤正一 小林正夫 瀬川武夫 田中常太郎 深沢実 前田春雄 正岡定明 松倉松造 大西兼光 鈴木春男 島中芳勝
2	22	鶴沼栄吉 大野英夫 山下正光 小林茂 石持良作 大坪正信 柏木惣吉 斎藤幸作 島上吉勝 高橋左吉 高山美一 中川隆義 長谷報一 養口金弥 山本浅一 米原勇吉 遠藤吉道 栗原博 桜岡勝藏 小林正人 水上勲 村田正太郎 長部報一
1	8	中村清信 阿部寿雄 窪内久義 白坂裕吉 荒川進 小島角一 小野熊之助 平野清義
計	108	

出所：表4に同じ

表13 1960年の売得金額および賞金額

開催場	開催日数	入場人員	売得金額	賞金額	売得金/日	賞金/日	賞金額/売得金額
	日	人	円	円	円	円	%
旭川	20	25,152	109,935,600	490,570	5,496,780	245,285	4.46
岩見沢	9	6,081	17,793,700	1,364,800	2,224,213	170,600	7.67
帯広	14	11,313	50,034,600	2,880,700	3,573,900	205,764	5.76
北見	9	6,946	30,099,500	1,583,400	3,344,389	175,933	5.26
計	52	49,492	207,863,400	10,734,600	4,075,753	210,482	5.16

注. 岩見沢9日間のうち、1日分のデータが欠損しているため、岩見沢のデータは8日分の集計。合計も51日分の集計である。

出所：表4に同じ

いうまでもなく、賞金は馬主に対して与えられるものであるが、賞金以外にも出走奨励金、着外賞金、繫養奨励金が馬主に対して支払われる。また、騎乗した場合は騎乗手当も支給される。10月旭川開催を例にとると、出走奨励金は管外甲級馬の3,000円が最高で、最低は管内丁級馬の400円である。着外賞金は一律500円、さらに繫養奨励金がある。これは外厩馬（競馬場の外に設けられる仮設的な馬房）を利用する場合に支払われるもので、1頭1日あたり70円が支払われている。

自分の馬に騎乗して出走した場合、どの程度の収入になるのかを推定してみよう。仮に、旭川の10月開催に丁B級に格付けされた自分の馬に自らが騎乗して3走し、すべて着外であったとしよう。

この場合、出走奨励金が400円、外厩に6日間繫養したとして繫養奨励金が420円（70円×6日間）、騎乗奨励金が1回150円なので騎乗奨励金が3走で450円。さらに着外賞金が500円×3走＝1,500円である。これらを合計すると2,770円となる。物価水準が現在と大きく異なるので、ここでは大工の手間賃を基準として、今日の物価水準におきかえてみよう。経済要覧に記載された1960年の大工の手間賃は1日あたり800円、2004年の大工の手間賃は18,640円であるから、現在は当時の23.3倍である。このレートで換算すると、仮設例の2,770円は現在の93,200円程度ということになる。

この数値をどう見るかであるが、農閑期における数日間のアルバイトとしてみればそんなに悪い収入ではないであろう。とはいえ、いうまでもなく、それぞれの地区の開催日数を考えると、これだけで生計をまかなうのは困難である。

しかしながら、4市を転戦し、何頭もの馬に騎乗するならば、それなりの所得を稼得することも可能であったろう。中西関松らのトップジョッキーたちになれば、もはや単なるアマチュアの競技者とはいえない稼ぎを得ていたと考えられる。つまり、この時期の輓曳競馬は多くのアマチュア的な競技者と少数のセミ・プロ的競技者によって構成されていたということがこの点からも確認できよう。

7. まとめ

公営競技としての輓曳競馬は、北海道内や東北地方で盛んにおこなわれていた輓馬大会（東北地方では馬力大会）を基礎として確立したものである。創設当初の競走馬資源は競走用に生産・飼育された馬ではなく、農耕・運搬・造材その他に使役されていた馬であり、騎手も競走を仕事とするプロフェッショナルな存在ではなかった。

青森県でおこなわれた輓曳競馬は開始数年で姿を消したものの、北海道では興行的な成功によって、開催



写真5 2005年夏、長沼輓馬大会



写真7 2005年夏、長沼輓馬大会（ポニー輓馬）



写真6 2005年夏、長沼輓馬大会

日数は徐々に増やされていく。輓曳競馬は日常的に使役されている馬を利用しておこなわれることから、競走馬資源は豊富に存在していた。

本稿でとりあげた1960年の段階ではまだまだ多くの使役馬が飼養されていたものの、モータリゼーションの普及によって急速に使役馬が姿を消し始める時期であり、いわば、日常的に使役されている馬とその馬を日常的に使っている人が騎乗するという輓曳競馬存立の初期条件が崩れはじめた時期であったともいえ

る。現在の輓曳競馬は馬肉需要に下支えされているとはいえ、競走用に生産された馬を、競走馬の調教を職業とする調教師が調教し、専門化された騎手が騎乗するという形態である。こうした現行の形態は、初期の形態が徐々に変化して形成されたものである。1960年はまさにこのような形態変化の方向が明確になりつつあった時代であるといつてよい。

1960年段階で、馬は依然として日常的な使役馬が圧倒的多数をしめており、それらは地元で開催される開催のみに出走し、品種的にも中半血を含む種々雑多な農用馬であった。しかしながら、その一方で、少数ながら一部の上位馬およびそれに騎乗する騎手のなかには地元だけではなく、4場を転戦し、なかばプロ的に活動するケースもあらわれていた。こうした騎手のなかから後にプロ化した輓曳競馬を担う人たちが生まれてきたのである。

本稿でとりあげた時代からやや下るが、輓曳競馬の興行的成功によって賞金額は増額されていく。このことによって、騎手・馬双方のプロ化がもたらされるのであるが、1960年代後半以降になると、アマチュアのないしはアルバイト的な騎手・馬は、使役馬の激減によって急速に姿を消していく。

使役馬中心であった農用馬の生産構造も、輓曳競走馬および肉用馬主体の生産へと大きく変動する。1960年代半ばまで、競走馬資源は必ずしも十分ではなかった。1960年半ば頃までは、農耕・運搬で多数の馬が活躍しており、競走馬資源には不自由していなかったという先の記述と矛盾するようだが、先の記述は数量的な意味では確かに資源は豊富であったという意味である。輓曳競馬の開催にあたっては、頭数確保のために主催者が農用馬をかき集めざるを得なかった。いいかえれば、使役馬が多く存在したが故に、馬をかき集めることが可能であったともいえる。実は丁B級馬というのはこうしてかき集められた馬のためにつくられた格付けであった。

使役馬の激減はこうした下級条件競走馬資源の消失につながったのであるが、その一方、輓曳競馬の興行的成功は、輓曳競走馬生産への強いインセンティブをもたらし、さらに肉用馬需要の存在がそのインセンティブを下支えするという生産構造を生み出した。

輓曳競馬の興行的成功に触発され、農用馬生産が確保され、さらに、本稿で明らかにしたようなセミプロ的競技者が生まれつつあったことから、主催者は輓曳競馬のプロ競技化に向けて舵をきる。そのひとつのあらわれが、1968年の市営競馬競技会の設立である。アマチュア競技者と農耕・運搬馬による輓曳競馬が、専門職業化された競技者によるプロ競技としての輓曳競馬へと変質を遂げたのである。このことによって、開催日数を増やすことが可能となり、前号所収拙稿の図3に示した1971年以降の輓曳競馬の開催日数増加を可能とし、今日の輓曳競馬に発展するのである。

(付記)

本稿は2005年11月に開催された日本ウマ科学会学術集会における一般口演をもとにしたものである。本稿の作成にあたっては、北海道市営競馬組合およびその関係者にたいへんお世話になった。ここに記し、深謝する次第である。

編集後記

新年明けましておめでとうございます。昨年は編集委員会で話し合った方針内容に沿って編集を行ってまいりましたが、今年もウマ文化や自然科学等の情報をマンネリ化に陥ることなく発信できるよう編集委員一同知恵を出し合いながら取り組みますので、宜しくご指導ご鞭撻下さい。

今号から編集委員を長年務められてきた田谷与一氏、柴田真美氏の両委員にかわり新しく佐藤美子氏並びに沼田恭子氏にお願いすることになりました。Hippophileの質的向上にご尽力されてきた前任者の両氏に感謝の意を表すと共に、新任の者には今後の多岐に亘る活躍と会員の温かいご指導をお願い致します。

今号の馬事往来には、十勝で活躍している荒川由紀子氏からは軌曳馬や肉用馬として用いられている農用馬の改良に牽引能力評価法を取り入れ能力の高いウマを選抜淘汰して残そうとする新しい試みの報告です。また、長岡一也氏は現在の競馬の隆盛の一翼を担っているラジオ競馬放送の創成期の紆余曲折状況を、軽快なタッチで紹介しています。

研究論文には、前号に引き続き軌曳競馬について古林英一氏から1960年の資料を中心に投稿頂きました。長文ですが、下段に記載されているノートの文面が論文を分かり易くしています。

特別記事には、佐々木直樹氏からは馬の消化器病の最近の診断方法として、血液に代わり呼気による消化器の機能異常を見出そうとする世界的な試みの紹介です。天谷友彦氏からは乗用馬に見られる主な疾病として運動器疾患、内科疾患、歯牙疾患の症状や現在の対処方法等から、乗馬専門獣医師の養成と的確な診断と治療の向上を期待しての紹介です。柏村文郎氏からは「帯畜の馬は障害を良く飛ぶが、選手はイマイチ」と評価されている帯広畜産大学馬術部の歴史とその秘密の一端を紹介頂きましたが、私などは青空大学と言われてきた所以にあるようにも思います。今後は日本の馬術界の基礎的部分を担ってきた各大学の馬術部の紹介記事を載せたいと考えています。古林英一氏からは昨年開催直前に中止になった北海道開拓記念館特別展示の馬文化展を取材した内容を紹介して頂きました。文面には道内の人間とともに歩んできたサラブレッド抜きの馬達の歴史が紹介されています。

(兼子樹廣)

入会申し込み方法

下記宛にお申し込み下さい。入会申込書をお届けします。年会費は5,000円(国内)です。

日本ウマ科学会事務局

〒320-0856 栃木県宇都宮市砥上町321-4

競走馬総合研究所内

電話 028-647-0656 FAX 028-647-0686

Hippophile, No. 27, 2007

2007年1月発行

<http://www.equinst.go.jp/JSES/>

編集委員長：兼子樹廣

発行者：小川 諄

〒320-0856 栃木県宇都宮市砥上町321-4

競走馬総合研究所内

電話 028-647-0656 FAX 028-647-0686

郵便振替口座番号 00130-3-539393

加入者名 日本ウマ科学会

足利銀行本店 普通口座 3483253

口座名義 日本ウマ科学会 一般 会長 小川 諄

印刷者：有限会社 アイベック

〒170-0002 豊島区巣鴨 1-24-12

電話 03-5978-4067